



ゲーテ★

ファウスト 若きヴェルテル
の悩み ヘルマンとドロテア

大山定一 国松孝二 高橋健二
前田和美 手塚富雄 訳

世界文学大系

世界文学大系 19

ゲ ー テ ★

昭和 35 年 6 月 30 日発行

定価 450 円

訳者代表 大 山 定 一

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話 (291)局 7651

目次

ファウスト

大山定一訳 5

若きヴェルテルの悩み

国松孝二訳 301

ヘルマンとドロテア

高橋健二訳 374

ノヴェレ

前田和美訳 407

詩

手塚富雄訳 419

われわれの未来とゲーテ

関ヤスパー生訳 445

解説

大山定一

年譜

465 459

装
幀
庫
田
綴

ゲ
ー
テ
★

ファウスト

捧げることば

かつてわかい日のわたしの眼に浮かんだ、おぼろな姿が、
ふたたび影のように、揺れながら近づいてくる。
今度こそ、おまえたちをしつかりと捕えてみたい。
わたしの心はなつかしい昔の夢にあたためられる。
ひしめきながら押しよせてくる姿よ、よし、そのままに、
霧や靄のなかから立ち出るがいい。
おまえたちの群をつむ魔法のいぶきが、
わかわかしくわたしの胸をゆすぶるかのようだ。

おまえたちはたのしかった日の、かずかずの思い出をもって
くる。

なつかしい人々の面かげがほのかに浮かびます。

なかば消え去った古い物語のように、

初恋も友情も、ふたたびわたしの心によみがえった。

悲しみは新しくなり、嘆きはまたも人生の

苦難や煩悶をくりかえす。ただかりそめの幸福にあざむかれ
て

美しい青春の時を失ない、いまは亡き人々の数に入った、

旧知の人の名をわたしは呼ぶ。

わたしが最初の歌を聞かせた人々は

もはや次の歌を聞くことができな

たのしい友だちの宴は破れてしま

はじめの反響はもう帰ってはこ

わたしの嘆きは見知らぬ俗衆の

彼らの拍手がいっそうわたしの

かつてたのしげにわたしの歌に

たとえこの世に残っていても、

つた。

しずかな荘厳な霊たちの国へと、

ひさしく忘れていたあこがれが

小声につぶやくわたしの歌は、

風にながれて爛々とひびくだけ。

はげしく身体がふるえ、とめども

かたい心がやさしくなごんで

手に持っているものが遠くに

消え失せたものが、かえって

舞台の前戯

座主、作者、道化。

座主

きみたち二人は、わたしが困った時には
いつもすすんで力を貸してくれた。そこで、われわれが

捧げることば

普遍、献辞といえはミューズにささげるものである。でなければ、作者の庇護者にささげるものにもきめられてはいるが、ゲーテは一般の読者にむかって自己のなまなましい感懐を告げるのである。ファウストのイデーはようやく成熟した。ゲーテは改めてファウストの完成に筆をつけた。旧稿を取りだしてみて、ゲーテはいまさら過去のなつかしい思い出や青春の回想にゆきあたるのである。

(1) 二十四、五歳の初めて『ファウスト』を『書こうとした「わかきゲーテ」』目である。シュエトルム・ウン・ド・ドラングの文学革命の先頭に立っていた青春の日のゲーテである。物に憑かれたように書いていたゲーテである。古典期のゲーテの清澄な目はまだ生まれていなかった。

(2) 『ファウスト』作中の諸人物のすがたを指している。初期のゲーテの目には、それがおぼろに、渦まき星雲何かかのようにしか映ってこなかった。

(3) すでに今は亡き人、たとえはゲーテの妹のコレネリア、友人のメルクヤレンツ、ゲーテに深い宗教的影響をあたえたクレッテンベルクなどを指すので

ドイツ各地で、今後どういふ興行をしたらいいか、ひとつ腹藏のないところを聞かせてくれたまえ。わたしは世間の人々を大いによろこばせたい。

自分もたのしみ人もたのしませるのが、世の中というもので。すでに丸太は立てられたし、板も張られている。みんなは、さて、どんなおもしろいことがはじまるかと期待しているのだ。

見物はかたずをのんで、眉をつりあげ、

一つびっくりさせるようなものが見たいと待っている。

わたしも大衆の心をつかむ手は心得たつもりだが、今度という今度ばかりは弱ってしまった。

格別世間が傑作になれっことになったというわけでもないが、何しろおそろしくいろいろなものを読んでいるからね。

新作がびちびち生きていて、しかもおもしろくて有意義、という工合にやるのには、どうしたらいいだろう。

わたしは大入りがねらいなのだ。

人間の波が小屋へ押しよせてくる。

大波が引いては打ち返すように、

せまい恵みの門を通ろうとひしめきあう。

まだ日も高い四時というのに、人々は

押しあいへしあいして切符売場を取りまき、

まるで飢饉の年にパン屋の店先で争うように、

一枚の入場券のために首の骨を折ろうとする。

十人十色といわれる人間に、このような奇蹟を起こさせるのが、

親愛な友よ、それがわれわれの作者の力だ。今日は一つ、その力をみせてもらいたい。

作者

その雑多な大衆がぼくのいちばんの苦手です。

彼らの顔を見ると、詩の精神は逃げてしまっています。押しあいへしあいする群集は、どこかへ隠しておいてください。

あの渦巻に吞まれたら、わたしたちはもうおしまいです。むしろわたしは、静かな天国の片隅へつれていっていただきたい。

詩人のきよらかな喜びはそこにしかありません。愛と友情が神々の手によって

心の内奥の祝福をつくりだし、それを育てるところです。

わたしたちの胸のなかから何ものかが生まれてきます。唇がはにかみながら片言のようにそつとささやきます。

案外にうまくゆくこともあれば、うまくゆかぬこともある。しかし、それを荒々しい瞬間の暴力が容赦なく吞みこんでしまうのです。

だから何年も何年もかかって、やつと完全なかたちに出来あがる作品だってあります。きらきら光るものはほんの一時のものでしかありません。

真実なものだけが長く後の世まで残るのです。

道化

いやはや、後の世なんて言葉は聞きたくもないですな。わたしが後世のことばかりに気をやんでいたら、

いったい誰が現代の生きた人間をたのしませてやりますか。たのしみたい人間は、たのしまなければなりません。

だから、ひとかどの役者が一座にいるということだけで、かなり大したことですよ。

見物をよろこばず腕や芸さえあれば、

大衆の気まぐれなんかにくよくよすることはちっともいりません。

あろう。

(4) フリーデリーケヤロツテヤリリなどの恋人、あるいはペーリッシュ、ヘルダー、メルクなどの知友、さらにシュトラースブルク時代、フランクフルト時代、ワイマル初期などのゲーテの周囲にあつまつた人々を意味している。

(5) 風によって鳴る自鳴琴の一種で、真音をだす。エオルスはギリシヤの風神の名。

舞台の前戯

ゲーテはインド劇『ジャクンタラー』の翻訳をよみ、それにならつてこのプロローグを書いたと言われている。たぶん一八〇二年の作。「舞げることば」は主観的なゲーテの感情告白であつて、ペンシテチックな絶望感がながれている。ゲーテは自然に果実のように成熟しなければならぬものを、強いて意識的なイデーによつて書きあげようとした苦しみになやんでいる。しかし、「舞台の前戯」は主観的にファウストという作品を書くにつれての心がまえや態度を分析し、あらゆる批評に対してゲーテの立場を説明した。そこにはゲーテのなみな作家としての決意と抱負が力づくよく押しだされている。

(1) 十八世紀末のドイツ

大ぜい集まれば集まるほど、それだけ芸のやりがいがあるというものです。そこで一つ、あなたにはぜひ本腰をいれて、りっぱにやってみせてもらいたいと思つてゐる。

詩人の空想にあらゆる合唱をそえて聞かせるんですな。理性もあれば、悟性も感情も情熱もある、といった場合に。それにもう一つことわつておきますがね、おどけを忘れてはいけませんよ。

座主

そうだ、まず何よりも盛りたくさんにねがいたいものだね。見物はただ見にくるのだ。何でも見たがつてゐるのが観衆だから、いろいろなものを目の前にならべてやりさえすれば、みんなはおどろいてただぼかんと口をあけて眺めてゐるだろう。

きみは広く大衆の心をつかんで、たちまち人気作者ということになる。

数は数でこなすよりほかに方法がないのだ。

めいめいは、けつきよく、すぎすぎに何かをさがしだすにちがいない。

たくさん持ち出しておけば、それでよりどり見どりというわけだ。

みんながけっこう満足して帰つてゆく。

お芝居を書くからには、やはりお芝居たっぷりにねがいたいね。

何も彼もほうりこんで、うまいシチューをこしらえる——あの手をつかりのだ。

工夫もお手がるなら、膳立もお手がるでいい。

苦心惨憺して全体をまとめてみたところで、まったく無駄な話。

どうせ見物は、てんでにむしり取つてしまふだけのことだからね。

作者

そのような手さきだけの仕事がどんなにつまらぬものか、あなたにはわからないのです。

そんなものは真の芸術家を恥かしめるだけです。

黙つて聞いていると、くだらぬ先生がたのやつつけ仕事か、あなたは何よりありがたい金科玉条というのですか。

座主

せつかくの非難だが、まあ馬の耳に念仏といふところかね。一仕事やつてみようという男には

第一に道具しらべが肝心だ。

考えてもみたまえ、きみは軟かい木を割る役目だ。

きみはいつたい誰のために芝居を書くと思ふのかね。

退屈しのぎに来る客もあれば、

山もりごちそうになつた腹ごなしに来る客もある。

もつと手におえぬのは

新聞や雑誌を読みあきてから来る客だ。

仮装舞踏会のもりで上の空で来るものもあるし、

物見だかい好奇心だけで駆けつけるものもある。

そのうえご婦人がたときたひには、一文のギヤラもなしに、お化粧と顔を見せに来て、けっこう芝居までしてくれる。

きみは詩人の天国でどんな結構な夢をみているのかね。

満員の客席がやはりうれしいとすれば、それはなぜだろう。

そばへよつて観客の顔つきをよくよく見るがいい。

半分は冷淡だし半分は野暮だ。

芝居がはねたらトランプをやるやうなもの。

女の胸にしがみついて一夜を騒ぎあかそうとするもの。

そんなくだらぬ目的のために、わざわざミューズの女神を苦

は、まだ劇場らしい劇場がほとんどなかった。小屋がけの旅まわりの芝居が普通である。座主はそのような一座を組織する興行師である。だから彼の演劇観は観客の俗悪な趣味と好みに適合すること、大当りをとること以外ではない。

(2) 聖書の「狭き門」から来ている。

(3) 作者は上演脚本に手を入れたり、プロローグやエピローグを書きそえたり、自作を劇団の新しい上演曲目に加えたりする興行作者である。座主が演劇をスペクタクルであり興行であると考へたように、作者は演劇を純粋なポエジーであると主張する。しかし、ゲーテはただ「作者」の立場から「座主」を否定するだけではない。むしろゲーテ自身が「作者」と「座主」の二つの立場に分裂するのである。(たとへばタソとアントニオのように。) 一方ではポエジーの純粋と統一を主張し、一方では新しい劇的でない「アウスト」をねらう。「ファウスト」はもつとも大胆な、野心的な、演劇のこころみである。

(4) 道化は別に作中の人物や事件とは大した関係なく、舞台上で登場して人々をわらわす俳優である。彼は俳優の立場から彼らしい

しめるのは、馬鹿のこつちようといわねばならん。だからですね、もつともつと、何でもたくさんに振舞うことだ。

それでせつたい、まとはすれつこはしない。しんから満足さすことができなるとすれば、みんなを煙にまいてやればいいのさ。

おや、どうしました？ 感動したのですか、胸が切ないのですか。

作者

それならどこかへ行って、ほかの奴隷をつれてきてください。自然があたえた最高の権利を、人権の自由を、わたしは強いてあなたのために

無造作にすててしまわねばならぬとでもいうのですか。詩人は何によって人々の心をうごかすのです。

詩人は何によって宇宙の万物を支配するのです。この胸からあふれ出て、全世界をふたたび心のなかくみられる、

美の調和ではないでしょうか。自然は終りのない糸をただ無関心に燃りながら、何が何でもつむに巻きつけるだけです。

すべての生きものは順序もなく秩序もなくあらゆるものを雑多にならべて、ただいやらしい騒音をたてるだけです。

何の変化もなくながながとつづいたものに、潑刺とした区切りをあたえ、リズムと生動をつくりだすのは誰ですか。

ばらばらのものを普遍的な靈感によびさまし、それらに莊嚴な諧調をうたわせるのは誰ですか。

はげしい風雨を情熱のあらしに化すのも、夕ばえの光に崇高な意味をあたえるのも、恋人のあゆむ道のほとりにうつくしい春の花々を咲かせるのも、意味のないみどりの木々の枝をありとあらゆる名譽のシンボルとして

みごとな花環にあむのも、いったいそれは誰がするのです。そして、オリンピックを昔のままに守って神々をつどわせるのは、誰ですか。

すべては詩人のなかに啓示された人間精神の力にほかなりません。

道化

なるほど、では、その結構な力を存分に發揮してもらうことですな。

そして、詩人とやらの商売を思いきりうまくおやりなさい。きつと恋の冒険に実があるのとおなじですな。

はじめは偶然ちかづきになる。何やらを感じる。ふと足がとまる。

だんだんもつれて、ぬきさしならぬことになる。幸福が芽はえる。はたから水をさす。

いい気であるうちに苦勞がつもる。といううちに、もうりっぱに一篇のロマンスができています。

ひとつ芝居もそういうふうになりましょうや。人生のまっただなかを大胆につかむことですね。

やっている本人は、たいていは気がついていないのです。だから、あなたがつかむと、それがおもしろいものになる。いろいろな情景をならべて、ちよつとあたりをそえておく。

ましがいいだらけのなかに一すじ真理の光を投げられる。それだけで最上の美酒ができるのです。

独自の演劇論を述べているが、ここにもゲーテの演劇観の一端が語られていると見なければならぬ。ゲーテは「舞台の前戯」で、当時のドイツ演劇を分析批評しながら、自己のフアウストにおける抱負や主張をあらゆる角度から立体的に解説しようとして試みている。

(5) 当時のドイツ演劇に對する批評である。一般には「大史劇」とよばれた大袈裟な「お家騒動もの」のごとき芝居が風靡していた。レッシングも、ドイツの悲劇はフランス古典悲劇にくらべて、もっと多くのものを見せようと望んでいて、という意味のことを書いています。

(6) はかのゆく、背の折れぬ、確實な方法の選択。

(7) オヴィディウスの句、「彼女は見物するために、そしてまた、見物されるために、きてくれる」に掲げている。

(8) 傑作を書くようとして努力精進すること。

(9) 以下は、詩人の崇高な使命を説いている。ゲーテは何度もくりかえて同じのことを述べた。

(10) 月桂樹である。単なる木の葉が輪かざりに纏まれ、うつくしい詩句にかざられて、榮譽の最高シンボルである月桂冠になっ

みんながよるこんで乾いた喉をうるおしますよ。
むろん、つばみのような青年たちがあなたの芝居を見にあつ
まっています。

そして啓示にじっと耳をすまして聞き入るでしょう。
わかい繊細なたましいがあなたの作品から
メランコリーの朝露を吸うのです。

のみならず、あれもこれもと感情が掻きたてられる。
みんなは一人一人、自分のところに持っているものを拾い出
すのです。

わか者たちはまだ泣くことも笑うことも知っています。
感激に心をたかぶらせたり、色や形に心をよるこぼすことも
けつして忘れてはいません。

すでに出来てしまった人間は、何を持っていっても満足しま
せんが、

これからという人間は、けっこうよろこんでくれますよ。

作者

それなら、ぼくに過ぎ去った青春の日を返してください。
ぼく自身がこれから人間になろうとしていた時代です。

かずかずの歌がいずみの水のように
あとからあとからと新しく湧き出しました。
うす霧が世界をほのかにつつんでいました。

花のつばみが不思議を約束しました。
ぼくは谷いっばいに咲きみだれた

うつくしい花を思うままにつみとりました。

ぼくは何も持たなかったけれど、心から満足でした。
はげしく真理を求めると幻をよるこぶ心がありました。
どうかあの衝動をすっかりそのまま返してください。

苦しみにみちた深い幸福を、
憎悪の力と愛の情熱を、

ぼくの失われた青春を返してください。

道化

いやいや、落ちついてよく聞きたまえ。青春を取りもどさね
ばならぬのは、

戦争にいつてあなたが強敵とたたかかねばならぬ時ですよ。
かわいむすめが両の腕に力をこめて
あなたの首つ玉にぶらさがるときですよ。

マラソン競争の決勝点から
名譽の花環が遠くあなたをさしまねく時ですよ。

つむじ風のようなはげしいダンスのあとで、

主客いっしょに幾晩も飲み明かそうという時ですよ。
しかし、大胆に、優雅に、なれた手つきで

豎琴の糸をならしたり、
やさしい足どりで行きつ戻りつしながら

それと定めた結末への道があるいたりする——

それはあなたがたのような、老練な先生がたの仕事ですね。
だからこそ、われわれは割引きなしにあなたを尊敬していま
す。

座主

議論はすでに十分うかがったから、
もうそろそろ行為と実践にとりかかってもらいたい。

いつまでも挨拶をかわしているくらいなら、
そのまに何か有益なものができてもいいはずだ。

気分がどうのこうのといっても始まらない。
ぐずぐずしていれば気分は逃げてしまう。

きみが自分から詩人と称するなら
詩にむかって容赦なく号令をかけたまえ。

た。
(11)ギリシャの神々の座

である。「ゼウスの王座は

何によって固められるか。

それは大石とブロンズと

時によって」とゲーテは書

いている。芸術や文学は神

話を創造することはできな

かったかもしれない。しか

し、神話を造型し、神話を

実在させたのは、芸術と文

学のみからである。

(12)道化は以下で、大当

りをとって人をあつと言わ

せようという座主のもくる

みやポエジイの本質を主張

する作者の見解をはなれ

て、むしろ無意識な自由の

創造を説いている。かえつ

てそれが真実の生命にふれ

るのだ。現実の体験が何も

のよりも大切である。知ら

ない男女がいつのまにか近

寄って、仲のよい恋人にな

ってしまう。詩人の創作と

素材の関係も、やはりそれ

とちつとも違わない。気分

だの天来の啓示だのを待つ

ていたら、何もしないで日

が暮れてしまう。したがつ

てゲーテは、このファウス

トという戯曲が普通のいわ

ゆる戯曲とちがつて、きわ

めて多彩であり紛糾したも

のであり、意味深いものと

下らぬものとがまじり合っ

た説明しがたい作品である

ことを暗示している。

(13)以下作者は「捧げる

ことば」とおなじように、

われわれの注文はもう先刻ご存じのとおりだ。われわれは強い酒を所望したい。

さっそくいまから醸造にとりかかってもらいましょう。今日でなければ明日も駄目、

一日だって無駄にはなりません。

できそうだとみたら、思いきって、かまわず

そいつの前髪を引っつかむことですね。

一度つかんだら、もうこんりんざい放さない。

そして無理にも仕事をつづけるだけです。

ご承知のように、ドイツの舞台では

誰でもやりたいことをやってみるのです。

だから、今度は背景であれ仕掛であれ、

すこしも遠慮はいりません。

太陽も使うし、月も使いますよ。

星も存分に光らせてかまいません。

水も火も岩山も、鳥もけものも、

みんなお望みどおりです。

ちいさな板がこいの小屋のなかへ

神が創造した森羅万象をとりいれて、

天国から地上へ、地上から地獄へと、

ゆっくりと手さばきよく事件をはこびましょう。

天上の序曲

主、天使の群、後にメフィストフェレス、三人の大天使登場。

ラファエル

太陽はむかしのままに

同胞の星の群と歌をきき、その定められた道を

すさまじい音をたててすすむ。

太陽を見ただけで、理由は知らぬが、

天使たちは力づよさをおぼえる。

偉大な創造の御業は

最初の日のように荘厳を保っている。

ガブリエル

早く、おそろしく早く、

壮麗な地球が回転する。

天国の明るい昼と

恐怖の深い夜が交代する。

わたつみの潮が

岩根にくだけて白い泡をうかべる。

そして岩も海も

永遠の天体の運行にそっている。

ミハエル

海から陸へ、陸から海へ、

あらしがあらしと力をくらべる。

吹きすさぶあらしのまわりに、

深い作用の連鎖がつくられる。

われわれの道の行く手には

おそろしい雷電の破壊の炎がもえる。

しかし、主よ、われわれ神の御使どもは

明るい日々のおだやかな推移をたたえている。

三人の合唱

太陽を見ただけで、理由は知らぬが、

天使たちは力づよさをおぼえる。

あなたの創造の御業は

青春の喪失をなげいている。自由な、無意識な、わきこぼれるような創作の時期は、すでに過ぎ去ってしまった。省察と自己批判の苦渋な年齢が、詩人の筆のすすみを障げる。向う見ずの大胆な仕事はもうできなくなってしまうのだ。

(14) 道化は以下で、老年が失ったのは青春の肉体にすぎぬことを述べている。精神の青春は、青っぽい懷疑や自己否定になやまねばならぬ若年ではなくて、かえって中年以後の落ちついた省察と深い経験のなかから、いっそう純粋によりかえるのである。

(15) 作者は「天才」のインスピレーションを説いた。道化は生きた現実の「芸」の功德を述べた。座主は実践と仕事を求めた。しかし、この三者はそれぞれがいがいに矛盾したり反撥したりするものではない。むしろこの三者が内面的に一つになってはたらくところから、詩作品は誕生する。

ゲーテは現実の舞台の要求と純粋な詩人の理想を対決させながら、ユーモアがあれば酸っぱ味もある最後の結論を引き出すのである。

(16) カイロスのこと。カイロスはギリシャの幸運の神である。後頭部には髪がない。カイロスをつかむには前髪を握らねばならぬ。

最初の日のように莊嚴を保っている。

メフィストフェレス

旦那がふたたびこうしてお出ましになり、こつちとらの様子はどうかとおたずねになるので、ご家来衆にまじって、拙者もまかり出た次第です。ありがたいことに、旦那はいつでもよるこんで会ってくださいますね。

ご一同の衆には冷やかされるかもしれぬが、

わたしははばかりながら、しかつめらしい口はきけません。いくら氣どつてみても、せいぜい旦那から笑われるのが落ちでしょう。

それとも旦那は、もう笑うことなんかお忘れかもしれない。太陽がどうの世界がどうのということは、わたしにはわかりません。

わたしが知っているのは、ただ人間どもがどんなに苦しんでいるかというただけですね。

このちいさな神さまは、昔も今もおなじ性にできていて、それこそ最初の日のように奇妙ですよ。

せめて天の光の影などをあたえてやらなかったら、人間もすこしは幸福だったかもしれませんがね。

人間はその影を理性と呼んで、どの動物よりも動物らしく生きるために使います。

わたしの見たところでは、失礼な申し分ですが、人間というやつは足の長いきりぎりすとおなじことですね。

飛んだり跳ねたりしているかと思うと、すぐそこらの草のなかで昔の歌を呑気に歌っていますから。

それも草のなかでただだといひですよ、どんな掃きだめにだつて平気で鼻をつっこみますからね。

主

おまえのいうことはただそれだけか。おまえはいつも苦情しか持って来ないが、地上は永久におまえの氣にいらぬものばかりとみえるな。

メフィスト

まったくですよ、いつになつてもちつともよくなりませんね。人間の目々の苦しさを見ているとただ情けなくなるばかりで、もうわたしでさえからかう氣にはならないくらいです。

主

では、ファウストを知っているか。

メフィスト

あの博士ですか。

主

そうだ、わたしに仕える下僕だ。

メフィスト

なるほど、あの博士だけは奉公の仕方が一風変つていますね。飲み食いするのも地上のものはかけはなれてるし、胸のなかで湧き立つものが彼を遠くへと誘い出す。

自分の異常はなかなかに意識しているのかもしれない。

彼は天上のいちばん美しい星を取ろうとしているかと思うと、大地のもつとも深いたのしみをも極めたいと考えています。

近いものも遠いものも

彼の波立つ胸の底を満足させないのですね。

主

いまは何が何だかわからぬままに奉公しているが、やがてすべてがはつきりする境地へみちびいてやらねばなるまい。

植木屋だつて、苗木がみどりに芽を出せば、

何年か後には、どんな花をつけ、どんな実をむすぶかは知っている。

機会は二度とおとすれぬのである。

(17) 「擇げることば」はゲーテが『ファウスト』に着手した頃のなつかしい青春回想である。「舞台の前戯」は当時の劇壇の批評であり、ゲーテは真実な戯曲家の使命を述べている。「天上の序曲」は『ファウスト』全曲の根本的イデーを總括したものである。開幕のまえにこのような三つの前置きがなされることは、『ファウスト』という戯曲がゲーテにとってどのような重大さと切実さをもっているかを暗示する。

天上の序曲

「天上の序曲」は一八〇〇年と一八〇八年のあいだに書かれた『ファウスト』全曲のイデーを總括的にえがいた甚だ重要な一場面である。主とメフィストの關係、したがってメフィストとファウストの關係が端的に示されている。人間のまよいや過誤が單なる「罪」ではなくて真実の救済への「試練」であるというゲーテ獨特の世界観も、ここではつきり説かれている。ゲーテ自身、この「序曲」は聖書の「ヨハネ」からヒントを受けたと語った。

(18) 天界をつかさどる大天使。大地をつかさどる大

メフィスト

では、賭をしましょう。あの博士をみごとに奪い取ってみせ
ましょうか。

「異存さえなければ、いまからそつと
わたしの道へ誘惑してみせますよ。」

主

地上に生きているあいだは、
むろん、どうしようも、おまえの勝手だ。
人間は努力するかぎり迷うこともあるだろう。

メフィスト

それですっかり安心いたしました。死人を相手にするのはち
っともありがたくはありませんからね。

まるまるした色つやのいい頬がわたしはいちばんすぎです。

亡者なんかは猫だつて相手にしませんからね。

主

よろしい、おまえの好きなようにさせてやろう。
彼のまましいをその根元から引きはなして、

もしおまえの手におえることなら、
遠慮なくおまえの道へひきずりこんでみるがいい。

しかし、おまえはきつと恐れいって、頭をかくだらう。

「よい人間はいくら暗黒の衝動にうごかされていても、
けつして正しい道はわすれない」といってな。

メフィスト

わかりました。あまりお手間はとらせません。
きつとこの賭には勝つてみせます。

もしわたしの思うようになつたら、

喉いっぱいの大声で勝利を叫ばせてください。

埃や芥を食わせてみせます。わたしの身内の有名な蛇のよう

に、

きつとうまそうに食いますよ。

主

その時はその時で、また勝手にいつでもやってくればいい。
おまえはいつでも自由に好きなことをやればいいのだ。

わしはおまえの同類を憎んだことはない。

およそ否定する霊たちのうちで、大した荷厄介にならぬのは、

茶目氣をわすれぬいたずら者だ。

どうかすると、人間の活動はすぐたゆみがちになつてしまふ。

人間は絶対的な無為と休息をもとめる。

だから、わたしは、ついついたり引っぱつたりして、

悪魔の仕事にせいをだす仲間をそえておくのだ。

しかし、おまえたち、まことの神の子らは、

生きた生命のゆたかな美しさをよるこぶがいい。

永遠に発展と生成をやめぬ大きな創造の力が

おまえたちのまわりにやさしい愛の柵を結うだらう。

そして現象となつてゆらめき変化するものを

おまえたちの堅固な思惟がつなぎとめるのだ。

〔天国は閉じ、大天使らは分れ去る〕

メフィスト〔独白〕

ときどき、あの大將にお目にかかるのは、うれしいことだ。

いつまでも喧嘩をしないように気をつけねばなるまい。

悪魔にさえ、あれほど人間らしい話をしてくれるというのは、

どえらい大旦那としては、なかなかできないことにちがいない。

天使。

(3) 大氣の諸現象をつかさどる大天使。

(4) 暴風や落雷はおそろしい破壊力である。しかし、天使たちの目は、かえつてそこに宇宙の莊嚴な秩序を見る。破壊と生成、死と誕生、変化のなかの統一、統一のなかの変化。だから、あらしや雷雨も、無風な、安穩な、明るく一日の推移と、すこしも変わらぬのである。

(5) 人間は理性をつばさにして空高く飛ぶことにはきぬ。ただきりぎりすのよう

に、ちよつと跳ねては落ちる。そして、がさがさ備

いあるいている。

(6) ファウストは人間であるかぎり、迷つたり過誤を犯したりしている。しかし、真実の努力をわすれることさえなければ、天上の救済があたえられるのだ。

第二部、ファウスト昇天の場面で、天使は「たえず努力していそむ者はわたしたちが救うことができま

す」と歌っている。

(7) 以下、ゲーテの悪否定) に対する肯定的なオプ

ティミステックな思想がよくあらわれている。

(8) 宇宙の大調和、天命をも人間界をもつらく生命の変化と統一。以下の意味は、神の創造は終っていない。破壊と生成のうち、

悲劇第一部

夜

高い円天井の、せまい、ゴシック風の部屋、ファウストは机のまゝの肘かけ椅子にかけている。不安な態度。

ファウスト

哲学も、法学も、医学も、
そして、よけいな神学までも、
一生けんめいになって

おれは研究した。思えば、
何という馬鹿げたことだろう。
ここにこうしたまま、おれはちっとも賢くなつてはいない。
マジスターだのドクトルだのといわれて、

もうかれこれ十年ばかりも、
上へ、下へ、右へ、左へと

おれは学生たちの鼻を引っぱりまわしたが、
しかし、けっきょく何も知ることができないとわかつただけ
だ。

それを思うと心が灼けるように痛い。
むしろ、おれは、ドクトルやマジスターや牧師や学者という
ような、

世間の馬鹿者よりはましかもしれぬ。

もはや懷疑や疑惑に苦しめられることもなければ、
地獄や悪魔をこわいとも思わぬ。

しかし、そのかわりに、あらゆるよろこびが消えてしまった。
ひとかどのことを知っているという自信もないし、
人間を改善し救済するために

何かを教えるという自信もない。
そのうえ、土地もなければ金もない。
名誉もなければ栄耀栄華に縁もない。

こんな生活をしろといったら、大もかぶりをふるだろう。
そこで、おれは思いきつて魔法に入った。
霊の力と啓示によって

神秘の扉がひらかれると思つたのだ。
苦しい汗をかいて

知りもせぬことを人にいわずにすむだろう、
奥底で世界を統べているものが
認識できて、そこではたらく
すべての力や一切の種子を直観するだろう、
もはや言葉を掻きまわす必要はない、と思つたのだ。

まどかな月よ、おれの苦悩を照らすのも
もう今夜が最後であればいい。

おれは真夜なかに
いくど机のまえで、おまえを待つたことだろう。
悲しい友よ、おまえの影は

そのとき書物や紙の上に静かに落ちていた。
おまえの光にぬれて

おれは高い山の上をあるいてみたい。
霊どもと山の洞穴のまわりを飛んでみたい。
夜霧にけぶつた牧場をさまよひ、

永遠に生きてはたらいっているのが、神の創造である。

この大調和のうちくしさが
おまえたちの心に深い真実
の愛をよびますだろう。
そして、その愛は永遠に激
らぬ持続する愛である。ゆ
らぐ現象として深うかのこ
とく見えるものが、かえつ
て、変化し統一する神の創
造の作用でなければならぬ。
それを真実深く愛する
ことよつて初めて正しい
イデーをつかむことができる
のだ。理性の法則をとら
えることができるのだ。

「人間は真に愛するものしか知り得ない」とゲーテは
言つた。

(9) ヒューマンというこ
と、すなわち、やさしく、
悪魔であるメファイストが
「人間らしい」という言葉
を無意識につかうのは、滑
稽なイロニーである。

夜

(1) ヨーロッパ中世の大
学は哲学、法学、医学、神学
の四学部からできていた。

(2) 中世の学位は、バツ
カラウレウス、マジスター、
ドクトルの三段階にわか
れている。

(3) ファウストの内面
には、はげしい感情が渦をま
いている。彼のモノローグ
は、それゆゑ、腹だたい
の反逆からメランコリックな
態度へ、はげしい呪詛から

知識のよこれを洗い去って、

おまえのすずしい露に身心を清めることはできないか。

ああ、おまえはまだ牢獄につながれているつもりか。

この呪われた陰気な石壁の穴のなかに。

やさしい空の光さえ、ここへは

スタンドグラスの窓を透って薄よごれて入ってくる。

高い天井まで積みかさねられた

埃まみれの虫食いの書物の山が、

せま苦し部屋をいっそうせま苦しくしている。

そのうえ棚にはすすけた古いノートや紙片がいっぱいつま

まっている。

まわりに置きならべたグラスやガラス瓶も、

無理やりに押しこんだ実験機械も、

先祖伝来の古ぼけた家具も——やれ、やれ、

これがおまえの世界だ。これが世界といわれようか。

胸のなかで、不安に心がしめつけられるのを、

それでもおまえは不審がる気が、

なぜ一切の生の衝動が、

わけのわからぬ苦しみに押しつぶされるかわからぬのか。

神は人間を

生きた自然のなかへ創つておいたのに、

おまえはすすとかびのなかで

動物の骨と人間の骸骨にとりまかれてゐるのだ。

さあ、逃げんか！ 広い世界へ出てゆかぬか！

ここにノストラダムス自筆の

一卷の神秘の書物がある。

道づれとして、おまえには恰好あつちなものだ。

おまえは星の歩みを知ることが出来る。

そして、自然の教えを受けるとるなら、

おまえの魂の力が目をさまして、

霊と霊とが語りあう、不思議な言葉を理解するかもしれぬ。

しかし、神聖な符は、いくら理屈や思考で、

解き明かそうとこころみても無駄だ。

霊どもよ、おまえたちはこのまわりをさまよっているにちが

いない。

おれの言葉が聞こえたら、すぐ返事をしてくれ。

「書しよを聞いて、大宇宙の符ふを見る」

や、これを見ると、たちまち何ともいえぬ歡喜が

あらゆる官能にみなぎってくる。

青春の神聖な生の幸福が、

あたりしく燃えて血管と神経をながれるのがわかる。

この符を書いたのは神ではあるまいか。

おれの内部のあらしが鎮められる。

あわれな心がよるごびに充たされる。

微妙な内部の促しとともに、おれのまわりに

自然のもろもろの力がかたちをあらわす。

いや、おれ自身が神ではあるまいか。心のなかが見るく冴さえ

わたる。

この符を書いた清らかな筆のなかには、

おれのたましいをつつんで生きてはたらく自然がそのままひ

ろがっているかのようだ。

いま初めて聖賢のいった言葉が身にしみる。

「霊の世界は閉ざされていない。なんじの耳目がふさがれ、なんじの心が死んでいるのだ。いざ、起たて、学徒よ、懈怠けんたいなく

激情的な欲求へ、幸福な観

照から狂わしい捨身へ、た

えまなく動揺する。この形

式をリリカル・ドラマ（抒

情的戯曲）と名づけた学者

がある。ゲーテはこの戯曲

形式によって、現実のある

長い時間の出来事を短い一

場面に圧縮して、かえって

充実した緊張と力をえがく

ことができた。フアウスト

のモノローグは単なる独白

ではない。彼の独白には激

情的なドラマがある。対話

以上のはげしい力で絶えず

何ものかに向って語っている

。だから、抒情的に自然を

えがいた詩句にも舞台的な

背景の描写や説明以上に、

ドラマチックな生きた生命

の躍動がながれている。

（4）フアウストは単なる

書物の知識を否定した。実

験室の標本や装置や器具は

すべて死んだ自然との交渉

にすぎぬ。彼は生きた自然

の神秘に直接接触しようとな

がうのである。

（5）フランスの占星術者

といわれる。一五〇三年—

一六六年。

（6）スウェーデンボルグ

に従えば、思考ではなく、

靈感によって啓示があたえ

られるのである。

（7）大胆な決意と同時に

、霊どもとの交感があるじ

まる。もう自由な、ひろび

ろとした啓示の世界が開か

れている。祝福と歡喜の瞬